

# アフリカ農村部における生活に関する事例報告

～ ウガンダ共和国の一事例 ～

Example report about the life in the African village area

--- One example in the Republic of Uganda ---

疋田 浩一\*

Koichi HIKITA

## Abstract

I performed volunteer activity of the elementary school administration in a village of the western part of Republic of Uganda for 4 months in 2005. I spent the time in the same schedule and ate the same things as a boarding student during the activity period. The living standard there was under the absolute poverty line obviously when I estimated an expenditure amount, but I was able to enjoy it without any problem. Based on experience of this time, I provide a one example about the life in the village part in Africa.

キーワード: アフリカ, ウガンダ共和国, 農村部, 家計支出

## I. はじめに

2005年9月から12月末までの4か月、アフリカ・ウガンダ共和国西部の村で、小学校運営のボランティア活動を行った。寄宿舎が併設されており、活動期間中は寄宿生と同じスケジュールで、同じものを食べて過ごした。この時の経験から、アフリカの農村部における生活の一事例を提供したい。

---

\* 関西国際大学現代社会学部

## II. アフリカ・ウガンダ共和国での生活

### 1. ウガンダ共和国について

ウガンダ共和国は、ケニヤ・ルワンダ・タンザニアと隣接する東アフリカ高原の内陸国である。赤道直下に位置する南西部は年間を通じて雨が多く降り、南側にはナイル川源流のビクトリア湖が広がる。ガンダ族をはじめとするバンツー系が多数を占める多民族国家であり、17～19世紀に成立したブガンダ王国は東アフリカ地域の政治的・文化的中心地であった。19世紀末の1894年からイギリスに植民地支配を受けたが、東アフリカ最初のマケレレ大学が設立されるなど文化的中心地としての役割を維持し、インド系をはじめとする外国人も多く移住した、1963年に独立し共和制となった。首都はカンパラ。公用語は英語・スワヒリ語だが、一般にはガンダ族が使うガンダ語が話される。宗教はキリスト教が60%で多数派、イスラム教徒が10%、残り30%ほどが伝統的精霊信仰等である。2005年当時はムセベニ大統領の長期政権の最中であり、周辺国の紛争もなく政治的には安定していた。通貨はUganda-shilling(Ush)で、当時の交換レートは1USD=1,850Ush前後、GDPは82億ドルで世界109位であり決して豊かとはいえない状況であった。雨が多く水と農耕にはあまり困らないが、湿地が多いためマラリアの被害が多い。また、近年ではAIDS感染の被害に悩まされた。

筆者が滞在したウガンダ南西のラカイ県の農村部は、丘に登ると東にビクトリア湖が望め、タンザニアとの国境ムトゥクラへは南へ20キロの地点にある。

### 2. 学校

ウガンダの小学校はP1～P7の7学年制で公立・私立がある。公立の学費は無償とされているものの、制服・教科書・文房具は各自で用意しなければならない、それができない場合はそもそも通学が許可されない。最終学年P7の最後に全国共通テストがあり、これにパスするとHigh schoolへの道が開かれる。パスしなければ義務教育は終了で、よほど裕福でない限り実家の手伝いなどをして働くことになる。



図 1. ウガンダ共和国の場所

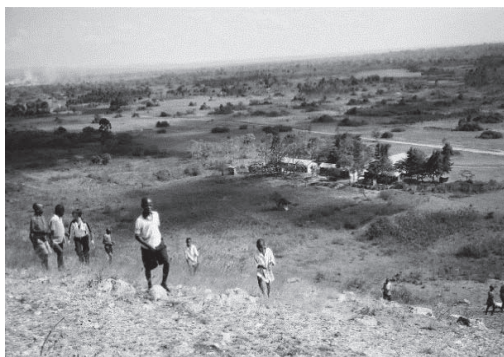


図 2. 滞在した小学校の全景



図 3. 小学校の生徒たち

### 3. 生活

水道・電気は通じていない。水は近くの水場へ毎朝汲みに行き、灯りは灯油ランプかろうソクを使う。雨が降ったらタライやバケツを並べて雨水を集める。

主食はトウモロコシから作られる「ウガリ」。現地では「ポーショ」とも呼ばれる。鍋に沸かしたお湯にトウモロコシ粉をいれて、餅より少し硬いくらいに練ったもの。ひと口分をちぎって手でこねて平たくし、豆などの煮物等のおかずと一緒に食べる。痩せた土地で栽培可能なキャッサバもしばしば食べられる。いずれも原産地は南米であり、これらが伝わる以前は「マトケ」と呼ばれるバナナを主食としていた。青バナナを蒸して潰したもので、芋のような味がする。他にも米やパンも食べられる。

おかずは肉・魚・野菜の煮物が中心で、学校での食事はほぼ毎日豆の煮物だった。トマト・玉ねぎは調味料のように少量を炒める程度で、野菜は少ない。肉類はごく稀に何かの記念日に供される程度であった。他に動物性たんぱく源としてはバッタが人気で、翅と足を除いて炒めたり煮込んだりすると、エビのような味で美味しい。

表1. 典型的な1日のスケジュール

6:00	起床。寮母がドアをノック、ポリッジ用 <sup>註1</sup> の砂糖をカップ3杯渡す。
6:30	ポリッジの朝食、隣のオフィスの鍵を開ける。
7:00	水汲み。掃除の時間の鐘。
7:30	始業時間の朝礼。点呼、国歌斉唱、お祈り(キリスト教)。 10人ほどのムスリムの子供達は黙って待つ。
7:45	授業。自分は部屋に戻って事務処理や読書。
10:30	ブレイクタイムでポリッジ。
11:00	NHKの短波放送を聞く。
12:45	昼食、豆の煮物とウガリ(ポーショ)。食後は昼寝。
14:00	午後の始業の鐘。
15:00	雨が降ってきた。タライと洗面器を軒下に出して水を溜める。 上澄みのきれいな水は沸かして飲み水に、残りの水で洗濯。
16:30	終業時間の鐘。国歌斉唱、お祈り。 放課後、大きい子供達はサッカー(男子)とネットボール <sup>註2</sup> (女子)。
17:00	先生達の終業時間。部屋でその日の経理の整理。
18:00	NHKの短波放送を聞きながら、サッカーに混ぜてもらえない小さい子供達と遊ぶ。 蚊取り線香に火をつけ、男子ドミと女子ドミに置く。
18:30	汲み置きの水でシャワー。
19:00	夕食、豆の煮物とウガリ。ダイニングルームに灯油ランプを灯す。
19:30	ダイニングの後片付け、夜の自習用にプレッシャーランプを準備。
19:40	ダイニングにプレッシャーランプを置き、大きい子供達は自習。自分は読書。
22:00	自習時間が終了。
23:00	歯を磨いて、就寝。



図 4. 朝の水汲み仕事から帰る寄宿生



図 5. 食事風景（ウガリと豆の煮物）

#### 4. 生活必需品

この土地で生活するに際して、最低限必要と考えられる食料品、燃料、医薬品について、2005年当時の価格を併せて示す（表2）。物価の参考値として、私立学校の学費（表3）を示しておく。

表 2. 主な生活必需品と価格（1\$=1,850Ush, 2005year）

Category	Item	Price
Food	Maize Flour	448 Ush/kg
	Porridge	379 Ush/kg
	Beans	500 Ush/kg
	Matooke	-
	Rice	1,060 Ush/kg
	Potato	100 Ush/kg
	Meat	1,979 Ush/kg
	G-Nuts	1,632 Ush/kg
	Salt	403 Ush/kg
	Sugar	1,350 Ush/kg
	Cooking Oil	2,538 Ush/lit
	Others: Tomatoes, Onion, Cabbages, Carrot, Cassava, Fish, Grass Hopper, Milk, Tea Leaves, Passion Fruit, Curry Powder	
Fuel	Fire Wood	1,000 Ush/bndl
	Paraffin	1,462 Ush/lit
	Candles	100 Ush
Medical	Chloroquine (for Malaria, 100tab)	1,500 Ush
	Cotexine(for Malaria, 8stab)	10,000 Ush
	Opele (for Scabie)	2,000 Ush
	Injection for Anti-Rabie	21,000 Ush
	Mosquito Coil (ABC)	400 Ush

表 3. 私立小学校の学費

School Fee	[Ush/Term]	[USD]
Boarding	70,000	37.8
Day Scholar (with Lunch)	15,000 (19,000)	8.1 (10.3)
Vocational	25,000	13.5

### 5. AIDS 孤児

80年代後半から90年初頭にかけて、ラカイ周辺が震源地となって AIDS が爆発的に広まった。ここがそもそも AIDS の発祥地なのか、タンザニア方面からの若い労働者が持ち込んだのかは判然としていない。"Ugandan"という単語には「ウガンダ人」のほかに、比喩的に「セックスの」という意味もあるというくらい、性的に開放的な土地柄である。婚姻も緩やかで、夫が死亡すると妻は夫の兄弟に引き取られる。夫が AIDS で亡くなった場合、その妻が感染している可能性は高く、引き取られた妻からまた夫に感染することになる。こうして一族全体に感染が広がってゆき、当時は毎日村のどこかで葬式が行われていたという。

多くのアフリカ諸国政府は自国内の問題を対外的には隠そうとする傾向があるが、当時のウガンダ大統領ムセベニは「開放政策」により情報を公開し外国からの援助を要請した。その結果世界中の NGO の援助合戦が巻き起こった。筆者の滞在当時はこうした混乱した事態は沈静化していたが、この AIDS 戦争の結果、「外国人」や「NGO」と聞くとすぐに金や物をたかろうとする依存体質と、親も親類もないけれど家と畑だけはあるといふ AIDS 孤児が大量に残された。

学校には、自宅から通学の子供、通常の寄宿生、孤児の寄宿生がいる。孤児の寄宿生達は、とても慎ましい。受入れ先の孤児センターのスタッフの話だと、彼らのうち半分は両親とも亡くなっており、残りの半分は片親はいるようだが、もう時間の問題だということだ。孤児の多くは引き取られるべき親類もなく、地域の guardian(後見人)が面倒を見ている。今も、何百という孤児たちが、彼ら地元の有志の人々の支援によって支えられている。ウガンダでは公立であっても学校は有料である。Scholarship もあるが、授業料が免除になるだけで、その他の文房具、制服、生活費まで面倒を見てくれるわけではないから、やはりある程度お金が無ければ通えない。孤児たちの数が多すぎることも有り、孤児センタースタッフも彼らが満足に学校へ通えているのかどうか正確に把握できていないという。彼らの慎ましさは、これまでの生活がいかに苦しく肩身の狭いものだったかを物語っているのだろう。

### 6. 障害児童

寄宿生の中に、AIDS 孤児ではないが肢体不自由の子がいる。両足の膝から先と左手の手首から先が麻痺している。唯一自由になるのは右手だけだ。アフリカの特に農村部においては、労働力として期待できない障害児は邪魔者でしかない。実家の納屋に家畜と一緒に半ば放置されているところを、学校の関係者が聞きつけて寄宿生として引き取った。ほとんどの場合、障害児は力尽きるまで放置されたままなのだろう。

### 7. マラリア

10月の雨季に入って、立て続けに3人の寄宿生がマラリアになった。毎日通う水汲み場周辺の茂み



が怪しいように思う。様子がおかしいので熱を測ると 39 度を超えている。あわててクロロキンを与える。40℃に近い場合は cotexine を砕いて飲ませる。特に孤児の子供達はギリギリまで我慢する。40℃を超えた場合は、最寄りの国立保健クリニックまで車で運び、点滴等の処置をしてもらう。学校の車があったのですぐに対処できたが、移動手段がない家庭では手遅れになるケースも多いだろうと思われる。

### Ⅲ. 生活費の推計

学校の出納簿を集計し、この土地で生活するために必要な金額の推計を行った結果を表 4 及び図 8, 9 に示す。数値は、1 週間で必要とされる一人当たりの費目別金額である。季節ごとにある程度増減はあるが、年間平均すると 4,264Uganda-shilling(Ush) /person/week となった。2005 年当時の為替レートは 1\$=1,850Ush であり、これで換算すると 2.3USD/person/week $\approx$ 0.33USD/day となる。世界銀行の定義した絶対的貧困ラインは 1.25USD<sup>註3</sup>である。Uganda の PPP が不明なため単純に比較はできないが、子供が多いため食費が安く済んでいることを考慮しても、生活費は非常に少ないといえる。収入の参考として、学校スタッフの給与(表 5)をみると、社会的地位が高い教員でも 32USD/month $\approx$ 1USD/day 程度である。これはほぼ「絶対的貧困ライン」を下回っているといつてよい。

とはいえ、筆者はその同じ場所・同じ生活水準で 4 か月共に暮らしていた。確かに物質的には「必要最低限度」ではあったろうが、その間特に食糧不足はじめ物質的な不自由さや健康上の問題を感じたことはなかった。農村部ではその地域の水準に合わせた物価になっており、物々交換による経済活動もまだ機能しているため、普通に生活するだけであれば何も不自由を感じない。

しかしながら、病気・怪我など健康上の問題、家屋や車の購入・修理等、一時的とはいえ大きな収入が必要な事態が発生すると全く対処しようがなくなる。家屋の修繕等は地域の協力で最低限まかなえるだろうが、車や医療は諦めざるを得ない。特に医療は国や海外からの支援頼みとなっている。



図 6. 卒業式に向けた歌の練習



図7. 休日の洗濯と散髪風景

表4. 学期ごとの一人・週当たり支出

[Ush./person/week (1\$=1,850Ush)]

Item		1st (1/21-4/24)	2nd (5/16-8/21)	3rd (9/12-12/11)	New Year Holiday	Total
Food	Maize Flour	1,182	599	824	1,102	864
	Porridge	58	83	87	69	78
	Beans	54	120	261	278	174
	Matooke	40	10	41	32	31
	Rice	81	81	15	139	58
	Potato	13	58	33	9	33
	Meat	0	9	29	93	21
	G-Nuts	99	130	4	0	61
	Tomatoes	29	24	16	37	23
	Onion	30	12	10	28	16
	Salt	13	7	12	15	11
	Sugar	242	17	113	83	114
	Cook. Oil	114	68	78	60	82
	Others	72	9	39	202	50
Fuel	Fire Wood	204	67	124	46	121
	Paraffin	106	149	147	94	130
Medical Treat.		94	0	193	44	119
Stationary		76	304	193	23	157
General		926	1,295	1,419	1,103	1,218
Repair		66	700	171	14	204
Transport		683	1,115	668	210	696
Total		4,183	4,857	4,476	3,680	4,264

注1) 出納記録より筆者作成

注2) 支出をカテゴリ別に集計し、週ごとの在籍者数総計で除する。

$$\frac{\text{カテゴリ別支出計 [Ush]}}{\text{週別在籍者数総計 [人・週]}} = \text{一人・週あたり支出}$$

ここで、週あたりの昼食・夕食数は、住込みは 2 回×7 日=14 回に対して、昼食のみは 1 回×5 日=5 回なのでおよそ 1/3。これより「週別在籍者数」=Boarding(住込み)+Daily with Lunch(昼食付通学)×0.3 とした。

注3) Transport については、3rd Holiday Term にデータ整理等事務処理のため最寄りの町のネットカフェに通っていたため、この影響を除外している。

注4) Generals の細分は非常に細かいため、推計対象となる主な費目名だけ記しておく。

表 4 (附表). Generals, Transport で推計対象とした費目名

Category	Item
Sanitary	Mosquito Coil, Vaseline, Soap, Toilet Rolls, Tooth Brush, Razor Blade, Sponge, Steel Wool, Towels
Office	Telephone, Battery, Mobile Fee(Air Time), Calculator, File, Glue, Match box
Furniture	Bed Sheets, Blanket, Mattress, Uniform, Desks, Chairs, Cups, Plate, Spoon, Basins, Clock, Lamp, Kerosene Stove, Bicycle
Construction	Tools, Bucket, Brooms, Cement, Dust Pan, Jerry Cans, Rope, Nail, Lock, Measure
Livestock	Goat, Pig
Others	Condolence, Debt, Rental Fee
Transport	Bus, Share-Taxi, Petrol

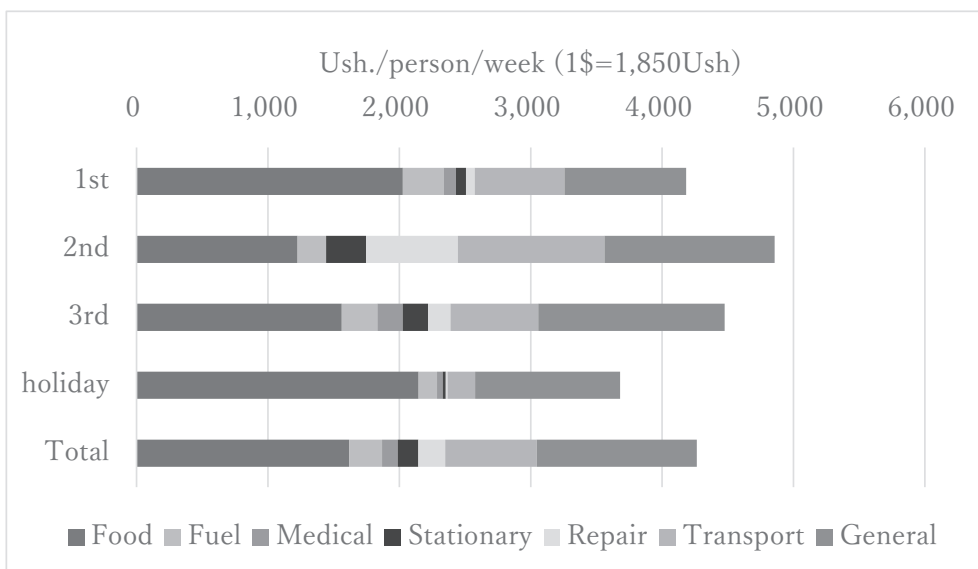


図 8 学期別の一人当たり・週あたり支出



表5. スタッフの給与

Salary	[Ush/month]	[USD]
Director	100,000	54.1
Teacher	60,000	32.4
Caretaker	50,000	27.0
Matron, Cook	35,000	18.9

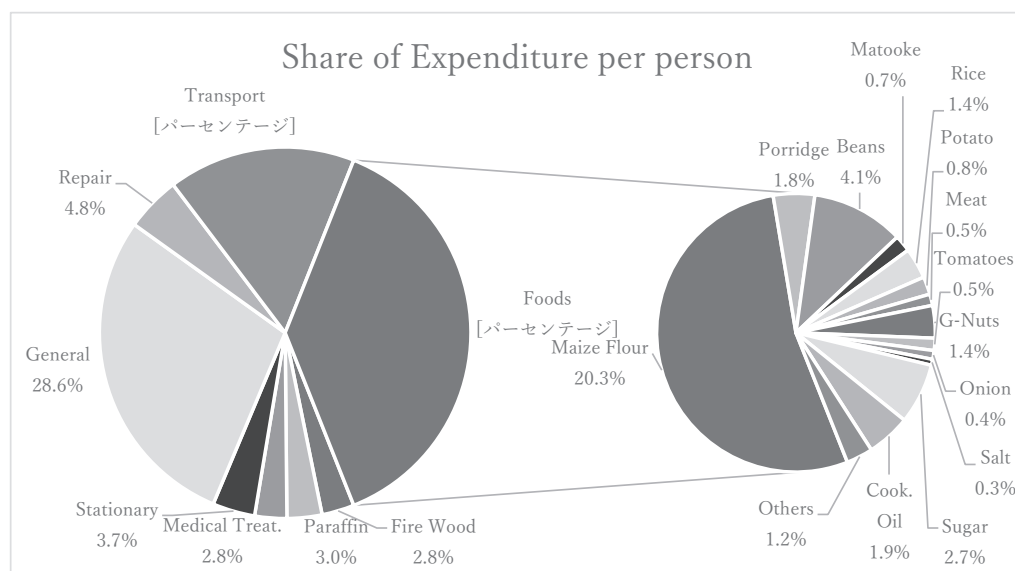


図9 一人当たり・週当たり支出（年計）の構成比

#### IV. おわりに アフリカについて

飛行機事故で亡くなった共同通信のジャーナリスト・沼沢均氏の遺稿集『神よ、アフリカに祝福を』の中に、以下のような記述がある。

『アフリカを旅していて頭を抱えるのは、その貧しさでも、社会基盤の脆弱さでもない。意志の貧しさだ。腐敗した国家権力。末端官僚にいたるまでの無責任と仕事に対する熱意のなさ。熱意がないだけならまだ救われるが、権力で小遣い稼ぎする卑劣さ。暴力、詐欺、あるいは甘い声のおねだり。「食う」という最低限の権利が剥奪された極度の貧困状態にあるものに対して善意を呼びかけるのは、あまりにこちらが無責任だろう。しかし、違うのだ。アフリカの貧しい者の話をしているのではない。富める者の建設に向かう意志の欠如が、この大陸をだめにしている。その意志の欠如が、普通の人々の生きることへの熱意を殺ぎとっているのだ。』（沼沢 1995：229）

私の滞在したウガンダ西部は田舎だったのでここまで峻烈ではないものの、しかしはっきりと「建設(創造)に向かう意思の欠如」は感じられた。上から下まで皆が揃って「ほどほどにのんびり行こうよ」

という調子なので、全体の時間の流れがゆっくりになるが、誰も急がないので問題にならない。皆でほどほどにやっというのがこの文化であって、日本のような皆で一緒に成し遂げようというような雰囲気はむしろ奇異であるし、特に田舎では理解もできないに違いない。日本の社会を一部の隙もなく組み上げられた精密な日本製エンジンに例えるなら、こちらの社会はゆるゆるのベルトが張られた滑車仕掛けの風車というところだろうか。風が止まれば動かないし、ベルトがゆるんでいるから滑ってあまり動かないし、頻繁に切れたりする。それでも皆まあしょうがないかのんびり眺めている。子供のころから「何かを進歩させるために懸命に取り組む」という経験をしたことのない人々に対して日本的「努力」を強いることは、拷問・虐待としか理解されないのかもしれない。進歩を求めている人々に、無理矢理それを押し付ける必要があるのだろうか、と考えた。



図 10. 寄宿生の子供たち

日本を含め先進国による対外援助の実態を現地をよく見かける。沢山の金を使っていろいろな物や人を送り込むが、それによってその国ははたして「豊か」になるのだろうか。本来はその国になかった物を急激に大量に与えることによって、その土地の文化を壊すようなことをしていないのか。個人のボランティアにしても、とにかく善意でやっているのだからと押し付けになりがちだ。余程気をつけてやらないと逆効果になってしまうこともある。

それでも、アフリカが気になってしまう。日本を発つ前、「乾いた空気に染まるアフリカの夕日を一度見た人は、またアフリカに戻らずにはいられなくなる」と教えてくれた人がいた。絶対貧困ラインをはるかに下回る経済状況の中で、筆者が見たアフリカには、同じ「第 3 世界」といえどアジアともアラブともまったく異なる、厳しさと気楽さとが奇妙に同居した独自の空気と魅力があった。

本稿を東アフリカ農村部における生活の事例に関する記録資料として残す。

#### 【注】

注1 ポリッジ(Porridge): ウガリより細かく挽いたトウモロコシの粉(Maize)をお湯に溶いたおかゆ。砂糖で甘くする。朝食と 10 時のおやつに飲む。

注2 ネットボール: 野外バスケットボール。

注3 世界銀行は絶対的貧困ラインを、2011 年 PPP (購買力平価) に基づき 2015 年 10 月以前は 1.25USD/day, 以降は 1.9USD/day としている。

#### 【参考文献】

- [1] 世界銀行 Web サイト, 世界の貧困に関するデータ,  
<https://www.worldbank.org/ja/news/feature/2014/01/08/open-data-poverty>, 2018 年 10 月 5 日(最終閲覧 2022 年 8 月)
- [2] 沼沢均(1995), 「神よ, アフリカに祝福を」, 集英社